

山古志の持続可能性を維持し、豊かな生活を実現するための薬師の杜の村望亭(小屋)づくりの試み

We maintain the continuous city function in the mountains in Niigata Chuetsu area and suggest a rich life model

後藤 哲男
GOTO Tetsuo

赤川 汐織
AKAGAWA Shiori

広川 智子
HIROKAWA Tomoko

キーワード：山古志、新しい仕事、魅力発信
通過点から留まる場へ、村望亭

Keywords：yamakoshi, new work, Attractive outgoing,
place to stay from the pass point, sonboutei

Yakushi no mori was maintained by students of by the Nagaoka Institute of design and local residents in 2014. In 2015, "the first forost concert of Yakushi" was held.

In 2016, we had the second concert in Mori of Yakushi". Also, we built a small folly there, named "Sonboutei", offering a place to rest. Thereby Yakushima mori was changed to "place to stay" from the "pass point" "Mori of Yakushi." Attractive role of Yamakoshi is expected.

1. はじめに

「薬師の杜の魅力を、もっと多くの人から知ってもらいたい」という住民の願いから始まった。長岡市山古志虫亀地域の薬師の杜は、2年前から整備を行い、この場所の魅力を知っている住民と山古志サテライトの支援員、長岡造形大学後藤研究室と一緒に新たな山古志の魅力の一つとして位置付けた。この場所から見える雄大な景色を前に写真の撮影を行う観光客は多い。そこで、この場所が「通過点」から「留まる場所」という存在になることを目標とした。それは「薬師の杜からの景色や周辺の自然の豊かさに気づいて欲しい、もっと味わい感じて欲しい」という住民から生まれた強い思いだった。訪れた人が立ち止まり、その場所を楽しめる仕掛けづくりを行うこととなった。今回の計画は、薬師の杜に休憩所づくりをする試みである。

本研究は、山古志の持続可能性を維持し続ける為に整備された「薬師の杜」を整備以降、どのように発信し、どの

ように時間を過ごしてもらうことが良いのか、関わる人たちが課題に向き合い取り組んだ。「留まる場所」からどのような効果が得られ、また地域と学生の交流から生まれるものとは何かを改めて考えさせられるものとなった。

2. 研究の目的・意義

2014年の研究は、「旧山古志虫亀地域の次の10年に向けての第一歩」として位置付けた。そこで「第1回薬師の杜・杜のコンサート」を開催した。薬師の杜からの見渡す限りの美しい自然の風景、目の前には福島県と長野県の間、そこから連なる美しい棚田に囲まれながら、鳥の鳴き声と風の音に包まれ、音楽を楽しむことの出来る豊かで贅沢な空間となった。この場所を多くの人と共有し、継続的に音楽祭を開催することが山古志や薬師の杜に訪れるきっかけとなり、地域に根付くことなのではないかと考えた。そして、2016年9月に「第2回薬師の杜・杜のコンサート」が開催された。ステージの場所を変更し、演奏者の背景に300度解放された山々の眺めを一望できた(写真1)。2回目の音楽祭は観覧席の金額と引き換えに住民が用意したおにぎり2個と豚汁を受け取り、景色を眺めながら昼食を頂いた。

会場入り口にはアルパカや山古志のお土産の品を置き、手に取る人の姿も見受けられた。演奏は、鬨牛太鼓・篠笛・三味線・クラシックギター・フォルクローレの様々な演目を楽しみ、時には全員で歌い、また配られた楽器で参加し会場は音・景色・風を楽しむ空間として一体となった。

この音楽祭が第3回以降も続いていくこと、さらに音楽祭以外にも持続可能性に貢献できる仕掛けが必要である。そこで、滞在時間を延ばし住民や訪れた人が互いに語り合い、過ごすことで「薬師の杜からの景色や周辺の自然の豊かさに気づき、もっと味わい感じることで出来る」留まる場所づくりの試みを研究の目的とする。

また、山古志の「山の暮らし」には、住民同士が協力し合いながら生活を維持するシステムがあり、村を維持する「仕事」と個人の経済生活を維持する為の「稼ぎ」がある。この「留まる場所」づくりの取り組みは、前者の「仕事」にあたり、新たな仕事を生むことで村の持続可能性を維持していくことへ繋がる。

今回の「留まる場所」づくりは、計画から施工までを「新たな仕事」として住民と学生が互いに協力した関係、達成



写真1：第2回薬師の杜・杜のコンサートの様子

感、喜びも含め、経験の中でそれぞれの豊かな生活を実現することは何かに繋がる。この場所づくりは計画からその後、訪れた人同士を繋げ、美しい景色を共有する場所として山古志の魅力になる。この魅力に気づき堪能した人が、一人二人と伝え発信し、もう一度訪れたい、暮らしたいと思う魅力の一つとして十分に意義があると考え。新たな村の第一歩と位置付ける。

3. 3年後期の課題

長岡造形大学の建築・環境デザイン学科の3年後期「空間デザイン演習Ⅱ」にて設計課題を行った。山古志を題材として行った設計課題は「山古志虫亀地域活性化プログラム」と題して、「今よりもより良い暮らしをするための建築の提案」というテーマのもと、学生は取り組んだ。

授業の中では現地調査をし、山古志の現状について調べた。問題点や山古志の魅力などを各自が発見し、それぞれの建築プログラムに盛り込み提案する。建築を考える上で、学生全員の共通コンセプトは「持続可能な」「魅力に富む」「豊かさを持つ」の3点を含んだコミュニティ構築の為のプログラムとした。山古志の魅力を最大限に建築プログラムに組み込み、住民や観光客などに対して魅力を発信でき、継続的に伝えることのできる場所、建物を目指す。

2016年の各自の提案内容は、「錦鯉センター」「虫亀闘牛場」「農業体験施設」「村の図書館」「村の自然体験学校」「村の自転車停留所」「村の保育園」「村の音楽ホール」の8つの建物である。

現地調査をした際に子どもの数が減っていることを懸念する声が聞こえた。過疎地域である山古志では子どもの出生率が低い。この問題に対して子どもの数を増やす為のプログラムでなく、子どもがより良い環境で育つプログラムをこの山古志で取り組むことを提案した。

「村の保育園」は、「村だから出来る子育て」に着目し、村の要素である人、自然、文化など村の全てが子ども達を育てる上で重要な要素となり、子どもはそこでのびのびと過ごすことが出来る。山古志には、豊かな自然があり、その中で住んでいる人々がいる。恵まれた環境の中で育つ子育ては大きな価値があると考えた。この環境の中で育つ子どもは村を愛し、将来的に村の為に働き、村の持続可

能性に繋げていくことを期待する。この建築には、「むらの保育園 ほかほか」と名付け、8つの建物の中心に位置づけ、他7つの建築が囲むように配置している(図1)。

他の建築と関係性が深く、その関わり合いが効果的に働くことで共通コンセプトである「持続可能な」「魅力に富む」「豊かさを持つ」を可能にしていくことと位置付けた(図2)。

例えば、「農業体験施設」は人口が減少している地域の山古志に外部からの定住者を増やすことを目的とした提案である。定住から結婚、出産の増加も目指しており、保育園との繋がりも大きい。農業での生活支援を行い、定住者の為の住居空間と農業作業スペースを持つ施設である。農機や荒れた田畑を再活用する。百姓の先輩である地域住民から指導者として関わってもらい、知らない土地で生活を始める際には不安が多いが、まず指導者との繋がりを作り、そこから村全体に馴染んでいくことができるプログラムになる。他にも、都会の学生を対象とした農業体験や村の子ども達の農業作業も行うことができる。

「農業体験施設」の定住する家族の子どもは「むらの保育園 ほかほか」に通い、発表会やお遊戯会の時は「村の音楽ホール」で行う。本を読む、山古志の文化や歴史を学びつつ覚えることを「村の図書館」で行う。子供は、田畑や散歩する地域の大人と触れ合いながら季節ごとに色づく植物や虫・鳥を発見し、高低差の景色を見つめ、豊かな感

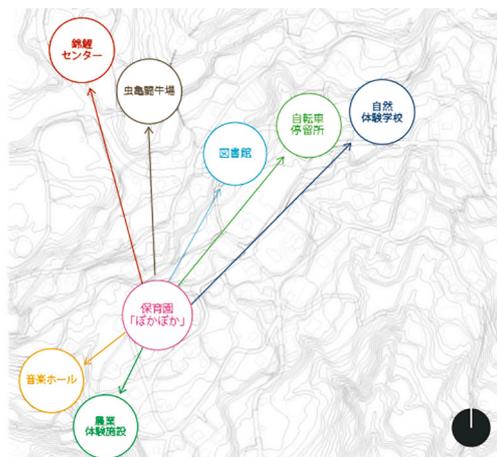


図1：村の保育園と他の建築との位置関係

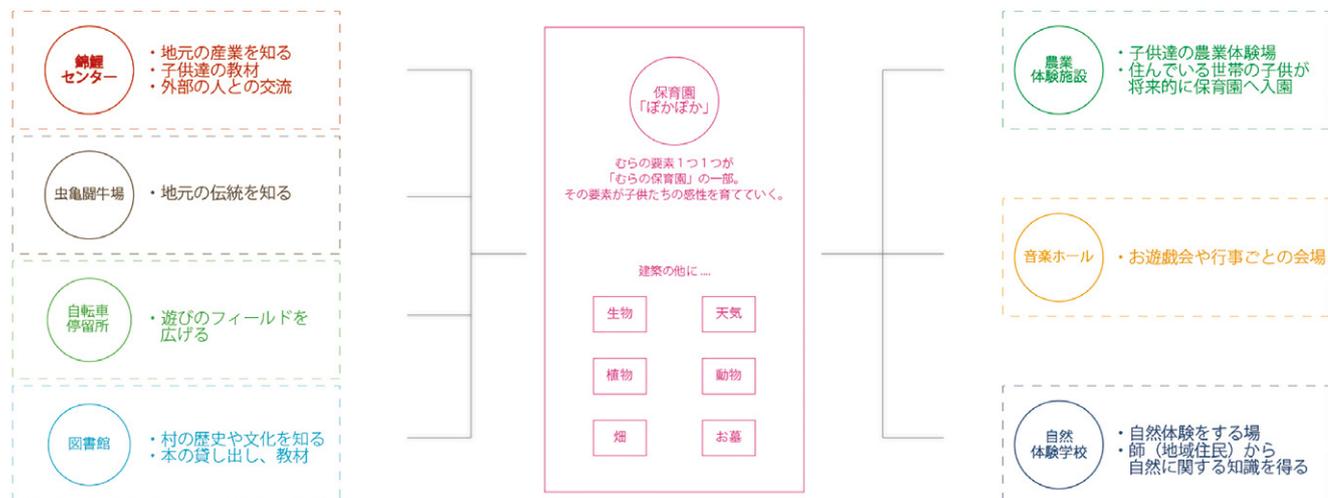


図2：村の保育園と他の建築との関係図



写真2：薬師の杜からの景観

性を養っていき、山古志の魅力を最大限に感じながら成長することが出来る。

以上の授業の経緯もあり、4年前期「建築デザイン演習」にて薬師の杜の休憩所（小屋）作りを住民達と学生9名、教員がともに取り組むこととなった。

4. 山古志・虫亀の「村望亭」の概要

薬師の杜の休憩所（小屋）づくりは、住民・観光客の滞在時間を増やすことに繋がる。滞在時間が長い分、その場の魅力に触れ、感じてもらうことから何度も訪ねたくなる場所にできる。魅力を知ることによって薬師の杜を、山古志を好きになってもらう。そこから持続可能性を持つ為の取り組みとなることが期待されている。そして、「村望亭」は地域住民、観光客それぞれのコミュニケーションの場ともなり得る。地域住民同士での交流の場ともなることで井戸端会議から始まり、これからの村のあり方の話のように広く深い、意見交換の場となることも大いに期待する。

建物としては、冬の積雪のことを考慮し、薬師の杜の景観（写真2）を壊さないように工夫を凝らす。さらに、最大6人程入れるスペースを確保し、コンサートの際にも活用できるようにする。

5. 実施内容

(1) 計画案作成

山古志には、牛の角突き（闘牛）や錦鯉など外部に向けての発信源がある。錦鯉は産業として、牛の角突きに関しては伝統的な行事としてだけでなく、観光という分野での位置付けがされている。地元で育て、発信していくことで地域の持続可能性を示していこうとしている。そんな中で、今回の「村望亭」の計画は、山古志の魅力伝える新たな発信源となると考える。

山古志木籠地域に、「郷見庵^{さとみあん}」という建物がある（写真3）。山古志木籠ふるさと会会長である松井治二さんによって開設された。2階建てであり、1階には直売所・休憩所、2階には交流スペースとして震災資料を展示している。この「郷見庵」という名前には、自分の郷を見てほしい、魅力に気づいて欲しいという開設者の願いが込められている。その中には、震災後の山古志の風景を感じて欲しいという想いもある。平成16年に起こった新潟県中越地震によって山古志地域は多くの被害を受けた。その後の復興の1つとしてこの「郷見庵」は存在する。建物の周辺には、地震によって壊れた家屋、荒れた土地から被害の甚大さが見て分かるものがある（写真4）。そんな現状を乗り越えて今生活をしている住民のことを多くの人に知ってもらう為にこの「郷見庵」は作られた。現在では、郷見庵には観光客が訪れ、その風景を前に、各々が写真を撮りつつ、そ



写真3：郷見庵の外観



写真4：郷見庵の周辺の風景



写真5：プレゼンテーションの様子

の姿を見つめている様子が見受けられる。

今では、「郷見庵」は山古志の魅力や歴史の発信源として位置付けられている。その2つ目として今回の「村望亭」を計画していきたいと考える。

(2) 地域住民と協議

冬の積雪と薬師の杜の景観を壊さないように学生はグループに分かれ、3案を提案した。

その3案(図4, 図5, 図6)をもとにし、薬師の杜にて住民との協議を行う。学生はグループごとにプレゼンボードを準備し、発表を行う。(写真5)会場は丸太の椅子を並べ、丸太の上に板を乗せ、机とした。晴空の下、大自然の中での話し合いになり清々しい気持ちの中での意見交換の場となった。それぞれが図面・イメージパース・模型を持参し、設計するにあたり考えたこと、選定材料の理由等、至った経緯を説明した。

各案に対して薬師の杜の敷地や山古志の気候に詳しい住民から指摘をもらう。その上で、折衷案か1つに絞り進めていくのかを話し合いの中で決めた。

最終的にC案に決定した。決定理由は以下の通りである。

- ・単管である為、組み立てが簡単であり、住民が所持していた単管を使用することができるため、経費削減につながる。
- ・竹を使用することで景観上の配慮がなされている。

冬の積雪に対する構造では単管を組む仮設小屋で計画し、景観を壊さないように単管を竹で覆うことや屋根の部分に簾などを使用する方法とした。その後、仮設でありながら、空間に十分配慮する工夫を凝らした。

(3) 設計と材料の調達

村望亭の建物は仮設として、冬場は取り外しが出来る方法とした。さらに、比較的組み立てが簡単な単管を使用する。小屋の全長が約6mあり、単管を繋ぐ為の結合金物であるクランプも用意する必要がある。また、単管を構造材としてそのまま使用することは薬師の杜の景観上、問題がある為、単管の上に竹を被せていく方法とする。当初、屋根にも竹を使用する予定であったが単管の骨組みが竹の荷重に耐えきれないと判断し、最終的に竹よりも軽い簾を使用することとした。

配置は、図3に示す敷地配置図の通りである。

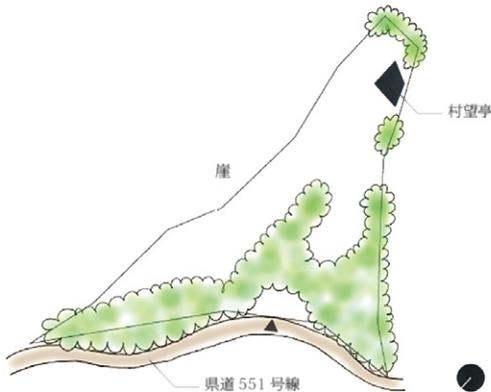


図3：敷地配置図

設計図面を作成したのちに、材料の必要本数、長さを算出した。材料の手配は、主に住民が行う。単管及びクランプの調達に関しては、別途で使用していた単管を再利用した。単管に被せる竹は、地元山古志の竹林から伐採した孟宗竹を使用した。孟宗竹は日本の最大の竹で程が太く、枝が水平に出て枝葉が細い特徴があるⁱⁱ。程が太いことで単

管が覆いやすく枝葉は細い為、加工しやすい。その結果、主な材料は費用をかけずに調達することができた。

■ A 案

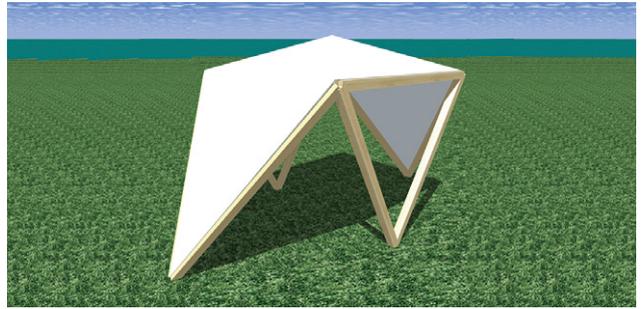


図4：A案のイメージパース

- 冬の積雪
部材数を少なくし、軽量化した。
- 景観を壊さない配慮：
白の幕を張り、目立ちすぎない外観にした。

■ B 案



図5：B案のイメージパース

- 冬の積雪
雪荷重に耐えられる強度を持たせた形にした。
また、曲線状にすることで落雪する。
- 景観を壊さない配慮：
骨組みの隙間から外の様子が見えることで視界を遮らない。雨防止の為のシートは、透ける材を採用。

■ C 案

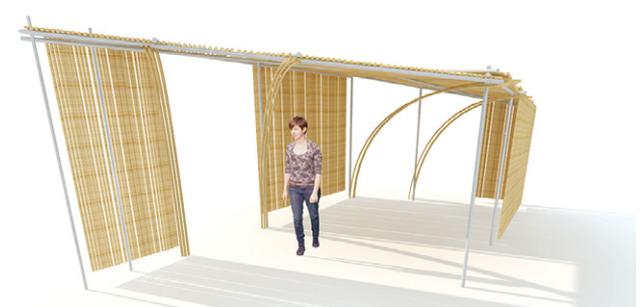


図6：C案のイメージパース

- 冬の積雪
単管を使用することで、組み立てと解体の手間を省く。
- 景観を壊さない配慮
竹を使用。単管の身の冷たい印象を無くし、温かみのあるイメージにする。

(4) 施工

1. 基礎

(1) 測量

地形が平坦でなかった為、レベル測量を行い、調整しつつ図面に沿いながら基礎を埋める位置を決定した。

(2) 基礎作り

基礎は現場でコンクリート材料を混ぜ合わせ、型に流し込み固める作業を行う。型枠は、上部を切ったカラーコーンを使用し、内部へ塩ビ管を挿入した(写真6)。カラーコーンはコンパネの上に並べ、ガムテープやブロック等で固定した。基礎は、そのまま1週間放置した。型枠にカラーコーンを使用する方法は、地域住民の知恵を借りて行った。

(3) 根切り

完成した基礎を地面の掘った穴へ埋める。穴に関しては、レベル測量を行いながら穴を掘る量を調整し掘り進めた。基礎の下には、砂利を敷き詰めて固めた。その状態では不安定である為、捨てコンの代わりにコンパネを敷き、敷いた上に基礎を設置した。

2. 組み立て

(1) 仮組み

形の調整と強度の確認を行いながら仮組みをする(写真7)。初期段階で方杖を入れる予定であったが、仮組みの結果、不要であることが確認された為、最終形態では入っていない。基礎と一緒に埋めた塩ビ管に単管を挿入し、柱として単管を立て、組み立てを行った。

(2) 位置確認

全体の形を把握しながら、位置と角度の微調整を行う。敷地の奥にある太陽パネルを隠しつつ、景色に溶け込めるような位置を確認しながら決めた。尚、学生と地域住民とが共同で行って作業したのはこの段階までであり、授業期間中での完成は出来なかった。

(3) 壁と屋根の取り付け

景観上の問題として、単管には竹を巻いた。また、白竹や簾を利用し、壁と屋根が取り付けられることとなった。竹の壁では、幾つもの竹を紐で縛り、繋げていった。これらの作業は地域住民のみで行った。

(4) 机の設置

建物の中には、地域住民が用意した机と、学生が制作した竹製の椅子が置かれた。この場所は、住民や観光客の憩いの場、交流の場となる。さらに、村の歴史等の展示物を設置する予定があり、訪れた人が山古志の歴史に触れられる場所ともなる。

3. 竹の椅子製作

休憩所づくりの期間中に、村の竹を使用して椅子を制作した。住民からアドバイスももらいながら学生全員で作業を行った。(写真8) 完成したものは、休憩所に置かれる他に祭り事にも活用される予定である(写真9)。



写真6：基礎作りの様子



写真7：組み立ての様子



写真8：竹の椅子製作の様子



写真9：休憩所に設置された机と竹の椅子

(5) 「村望亭」完成

学生と地域住民が協同で施行作業を行ったのは7月中旬から8月の夏休み前の約1か月間であった。それから1か月間は住民のみでの作業となりその後、完成を迎えた（写真10）。

6. お披露目会

2016年9月4日に地域住民と学生でのお披露目会を行った。完成した「村望亭」にて、お茶とお菓子が用意され、作業の様子を振り返ることや完成に対しての感想を話し合った（写真11）。その際、東京からの観光客が訪れており、地域住民や学生と一緒に小屋や周りの風景について話していた（写真12）。

「村望亭」という名前については、お披露目会の時に正式決定をした。それまでに、教員と学生がいくつか名前の案を提案し、選んでもらう予定であった。しかし、住民と学生と観光客で名前について意見交換が行われ、最終的に「村望亭」となった。

「村望亭」という名前には、幾つかの意味が込められている。「村」という言葉を入れることで今は無き山古志村への誇りを表し、「望」には、景色を見ることだけでなく、村の歴史を見る・伝えるという意味も込められている。

「村望亭」という名前決定後には、その場で看板製作が行われた（写真13）。

(1) 地域住民の声

「村望亭」づくりの試みは、薬師の杜に休憩所が完成し、この場所に更なる魅力づけがなされ「味がついた」と住民の五十嵐さんは語る。元荒地であった場所の魅力を知っていた住民の働きによって新しく生まれ変わった薬師の杜だが、その魅力を引き立て、発信源となる為多くの人の協力のもと「村望亭」は作られた。この場所から魅力を発信していくことによって、人との繋がりも出来ていき、村の活力になると考える。また、住民の長島さんは学生の考え(案)に触れられたことがとても新鮮で、良い経験となったとも話していた。

現代社会は、多くのモノで溢れている。都会の人々はモノやお金があることへ安心感や豊かさを求めすぎている。しかし、お金やモノが無くても豊かな生活は送れると住民は考える。山古志での生活は、自然との共存の重要性やお金が全てでないことを教えてくれる。それが「心の豊かさ」に繋がり、地方での山の暮らしの魅力でもある。

また、目的の1つである「山古志の持続可能性の維持」の点で、今回の試みに学生を含めることはとても重要な要素として捉えていた。村を維持していくためには、もう住民だけの力では足りない現状がある。そこで、外部からの新しい観点と若い力を取り入れることで、これからの村の維持に繋げていこうという考えである。その土地に長らく住んでいると気づかない魅力や資源を、外部の人から発見してもらい、一緒に広げていこうという狙いがある。

さらに、若者や観光客が訪れ、地域住民と交流することで村の魅力の発見に繋がるとともに住民の活力になり、満足感が得られる。その満足感は決してお金では買えない財産となると考えている。



写真 10：完成した「村望亭」の外観



写真 11：お披露目会の様子



写真 12：お披露目会には、観光客も参加した



写真 13：看板の製作

(2) 地域住民と関わる学生

今回の試みを通して、関わった学生は、「地域住民と協同で作業を行っていくという普段の学校生活では経験することが出来ない貴重な体験ができた。」と語る。また、「実施設計という点で、書いた図面が実際に形になる難しさや感動を味わうことができた。」「協同作業では、住民の昔ながらの先人の知恵を教えてもらえる機会となり、その中で話し合いや施工が行えたことがとても良かった。」「これらの体験は、一生に一度の経験であり、都会では得ることが難しいものであり、地方ならではの取り組みであった。」との話があった。

さらに、住民と学生とのコミュニケーションから、山古志のことを深く知ることができた。そして住民と学生のこれまでの山古志に対する認識のズレがあることを知った。例えば、学生が考える山古志の魅力に地域住民が気付いていなかったことやその逆のことでもある。施工中や完成披露会には、作業に参加していない住民や観光客が訪れ、この場所に来てもらえることがとても嬉しく、これからの可能性を垣間見ることができた。

(3) FM ながおかのラジオ取材

7月29日の協同作業の最後日に、FM ながおかⁱⁱⁱのラジオ取材が行われた。ながおか市民協働センターの職員とFM ながおかの職員の2名が作業を行っている学生へのインタビューの為に薬師の杜へ訪れた。取材は外で行われ、周辺の自然豊かな様子が伝わるようにと風や揺れる木々の音、虫の声が聞こえる中でインタビューが始まった。取材を受けたのは、代表として選ばれた学生1名である。内容は、自己紹介から始まり、依頼を受けてから施工までの簡単な流れの説明や作業を通して感じたこと、今後ここがどのような場所となってほしいか等であった。最後に、作業に参加していた学生と地域住民とで集合写真(写真14)を撮って取材は終了した。3週間後にラジオ放送がされ、その後はいつでも聞けるようにネット動画として掲載されている。

ラジオ放送は、「村望亭」の存在を多くの人に知ってもらえる一つのきっかけとなった。また、ラジオ放送を聞いた人達がさらに山古志自体の魅力発信にもなり、今後の地域の活力に大いに期待される。



写真 14 : 集合写真

7. 今後の課題と可能性

「村望亭」が作られたことによって、薬師の杜に「留まる場所」ができた。しかし存在するだけではなく今後、効果を広げていくことが重要となる。これからの課題として、その利活用の問題が挙げられる。まずは、「村望亭」の存在を、地域住民や外部の人、多くの人々に知ってもらうための働きかけが必要である。また、今回の試みで実現した学生との協同作業をこれからも継続していくことが村の持続可能性に繋がっていくこととなる。村の地域住民だけでは維持していくことが難しい現状を理解し、若者の力を取り入れ、共に進んでいくことが求められている。

村望亭は、「人が留まる場所」「交流の場所」「魅力の発信源」としての役割を果たす存在となる。通過点としての場所でしかなかった薬師の杜に休憩所として村望亭を作ることで「留まる場所」とした。人が留まることで、住民同士や外部の人と住民との「交流の場所」が生まれる。ここを訪れた人が場所の魅力に気づき、堪能した人が一人二人と伝え発信し、もう一度訪れたい、暮らしたいと思う。そのきっかけとしての「魅力の発信源」として機能することを期待している。この効果を得ていくためには発信の働きかけの継続が必要となる。この働きかけが地域住民にとっての新たな仕事となる。利益を得る為ではなく、自分たちの故郷の為の「仕事」となり、これからの山古志の持続可能性、住民の豊かな生活に繋がっていくと期待する。

謝辞

本研究を行うにあたり山古志虫亀地域住民の方々、山の暮らし再生機構山古志サテライトの支援員の方々に感謝いたします。

また、長岡造形大学、東優介さん、安宅巧実さん、岡村海斗さん、木村洋二郎さん、佐藤美樹さん、中村美雪さん、藤崎公太さん、前沢友宏さん、教務補助職員の関川遼太郎さんの協力なくして本研究は進行出来ませんでした。ここにお礼申し上げます。

注釈

- ⁱ 郷見庵-山古志古籠ふるさと会 : <http://yamakoshikogomo.com/satomian> 2016.10 閲覧
- ⁱⁱ (株)テクノート HP 高強度竹素材 参照
- ⁱⁱⁱ FM ながおか つなラジ「薬師の杜に東屋が！」http://www.fmnagaoka.com/diary/fmnagaoka_diary/6603/ 2016.10.24 閲覧